

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟

会報 No.68

令和8年4月1日

等身大の ワークショップ



会長 井上 豊年

能楽振興のために横浜能楽連盟でなければできないことがあるとすれば、それは五流を一堂に比較鑑賞できる秋の横浜五流能楽大会と春の五流交流のつどいかと思います。

趣味にも相性というものが大事です。好きに理由は必要でしょうか。心地よい響き、波長が合えばリラックス効果も倍増します。ただ能楽は双方向の芸術で、観客もある程度能動的に接しなければ良さを味わうことができないと言われています。初心者の方がどのような入り口にたどり着くことが

できるか。たとえば五流が一所に集まるワークショップがあれば良いかもしれません。これからの方も楽しみが持てるように横浜能楽連盟の会員による等身大のパフォーマンスはいかがでしょうか。まず五流が順番に短い演技(素謡と仕舞)をし、その後各流派のブースに分かれて説明があり質問も受けます。心地よさそうと感じた流派のブースと一緒にちよつとだけ声を出したり、白足袋を履いて扇を手にり口が見えてくるのではないのでしょうか。たまたま最初に出会った流派に決めるのもよいですが、選択肢があればより納得感があると思います。入り口からその先への進み方については、その場でアドバイスが得られると思います。縁遠いと思っ

ていた能楽の敷居が少しだけでも身近になって越えやすくなるに違いありません。人はふと時間ができた時、心にポカんと空白ができた瞬間、すぐ浮かぶ趣味があればへこんだ自分を支えてくれるでしょう。そして流派の人たちのかかわりによって和みも得られます。始めるに遅いことはありません。趣味はある意味多様に自己満足的なもの、心を満たしてくれるなら百点だと思いませんか。

また、一人(稽古や独吟)でやグループ(素謡や連吟)で、大きな声を出す。様々な姿勢で腹式呼吸をする機会(正座、椅子掛け、立って仕舞)が増えることで、自分のための健康寿命、さらには誰かのために役に立つ貢献寿命が約束されるのではないのでしょうか。今や誰にも可能性がある老いに対しても、楽しく健康を維持できるような予感を持てると思います。とはいえこれをあまり熱心に真面目に力説すると人は遠ざかります。だから問われた時にさりげなくお勧めしています。

横浜能楽連盟には五流16名の理事がいて、能楽の魅力を幅広く発信する工夫について話し合っています。ホームページの改良、この会報「幽玄」や大会開催のチラシ、発信することが

前進のきっかけになると信じています。横浜五流能楽大会では、お昼時に同じ曲目の素謡や仕舞を五流で競演する企画があります。また、若い世代、大学の能楽サークルの学生さんたちには五流交流のつどいに出演いただいで、昼食会もしております。

マイクもスポットライトや派手な照明装置もない、実にシンプルな能舞台に出演する緊張感、感情移入、ZONE体験。会員の皆さんそれぞれがご自身の流派の流儀に魅力と誇りを持っていて、そんな集まりが横浜能楽連盟なのです。

入会のご案内

横浜能楽連盟では、常時会員を募集しております。会員の方で、同門・同社中にまだ入会されていない方がおられましたら、ぜひ入会をお勧めください。個人でも団体でも受け付けております。入会希望の方は、ホームページまたは事務局へご連絡ください。

☆お知らせ☆

◎「第42回横浜五流能楽大会」

10月10日(土) 開催 (担当流派・喜多流)

会場 横浜能楽堂本舞台

・入場無料

五流各団体により、素謡・仕舞などが演じられます。各流派が同一曲を演じる五流競演もあります。

◎「第30回五流交流のつどい」

令和9年3月13日(土) 開催 (担当流派・金剛流)

会場 横浜能楽堂本舞台

・入場無料

五流各団体により、素謡・仕舞などが演じられます。学生による特別招待出演もあります。

第28回

「五流交流のつどい」報告

担当流派・宝生流 坂本 盛夫



令和7年3月15日(土)、「第28回五流交流のつどい」が、磯子区民文化センター・杉田劇場において開催されました。この横浜能楽連盟の主催事業は、横浜市にぎわいスポーツ文化局の共催、横浜市芸術文化振興財団の後援をいただいで開催されたものです。

開演は10時30分。担当流派宝生流の素謡「熊坂」で始まり、同流の素謡「杜若」で17時40分に終演しました。観世流・宝生



流・喜多流・金剛流・金春流・下掛宝生流の各流派から、素謡12番、連吟5番、独吟3番、仕舞16番の計36番のご出演をいただき、延べ238名の方々が参加されました。また特別招待出演として、相模女子大学から宝生流の能楽を稽古されている5名の学生さんにもご参加いただきました。

会場の杉田劇場は、横浜能楽堂が令和6年1月から大規模改修工事に入ったため、能楽堂が再開されるまでの間利用させていただいています。杉田劇場に



は立派な松羽目幕があり、前回から所作の配置を工夫したところ、さらにこれも前回から舞台の四隅に隅柱4本を設置したことと併せて、立派な特設舞台になりました。改めて、当初白紙の状況から会場探しを始め、杉田劇場に決まるまでご尽力された方々に感謝いたします。

また、今回の開催準備・運営等では、杉田劇場で初めて開催された昨年3月開催の「第27回五流交流のつどい」を担当された喜多流の方々や、また10月開催の「第41回横浜五流能楽大会」を担当された金剛流の方々から、丁寧かつ適切なご助言をいただきました。そして事務局のお支えもいただき、大過なく終えることができました。改めて感謝申し上げます。

第41回

「横浜五流能楽大会」報告

担当流派・金春流 榎山 俊二

今回抽出された改善点も理事会で協議され、次に生かされていくこととなります。この積み重ねにより、横浜能楽連盟の事

業はさらに充実したものになると思います。皆様のご協力ありがとうございました。

令和7年10月11日(土)、横浜市磯子区民文化センター・杉田劇場にて、第41回「横浜五流能楽大会」が開催されました。横浜能楽連盟主催、横浜市にぎわいスポーツ文化局共催、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団(横浜能楽堂)後援。

その日はあいにくの曇り空。朝からしとしと小雨模様で、肌寒さを感じていました。今回の準備は、金春流の流派会員だけでなく、会長・事務局の皆さんの多大なるご支援ご協力もあり、滞りなく進めることができました。大変助かりました。

出演番数は35番(素謡9番、連吟7番、独吟3番、仕舞16番)、出演延べ会員数は199名(観世56名、宝生39名、喜多30名、金剛22名、金春43名、下掛宝生9名)でした。五流競演の曲目は、コロナのため中止となった第37回横浜五流能楽大会(令和3年10月23日開催予定)の「巴」

観客動員としては、常時50名(100名くらい)が会場内に在席しており、来場には傘を手放せない足元の悪い中でも盛況であったと感じました。J-R新杉田駅直結という交通の便の良





さも幸いだと思います。
受付に感じていたことは、番組の進行具合や応援しに来た方の出演時間を確認される方が何組もあり、家族連れ、友人同士とそれなりに新しく来る方々の存在を知ることができました。

駅に近いという好条件があったからとは思いますが、横浜能楽堂の改修が終わって再開された時にも、新しい観客が引き続き来場していただけるよう期待しております。

なお、今回から、参加費の徴収を銀行振り込みにするということになりましたが、事前にすべて徴収することができました。皆さんのご協力のおかげです。

能楽の魅力

次の100年へ

観世流 水間 英樹

昭和100年・戦後80年という大きな節目の年となった昨年、新聞・テレビ等で様々な特集がなされた。私も団塊世代の一人として生まれ、能楽とも触れ合ってきたこの時代への想いを馳せた。

私が所属する「和謡会」も、昨年創立70周年の節目を迎えた。神奈川県庁職員の福利厚生活動の一環として立ち上げられた能楽愛好会。ここまで繋いで来られた数多くの先輩方や仲間たち、指導に当たって来られた先生方に感謝するばかりだ。

私は大学入学時に何も知らず勧誘されて入った部活「観世会」で初めて能楽と出会い、就職後

には「和謡会」とも出会う幸運に恵まれた。細く長くをモットーに続けてきた能楽との付き合いも早60年近くになる。謡や仕舞の稽古のみならず、各種発表会や謡蹟巡りなど、様々な親睦交流活動を楽しませていただいた。

だが、少子高齢化や趣味の多様化等社会情勢の変化で能楽界も厳しい状況にある。一時70名を超えた和謡会部員も今や3分の1ほどとなり、残念でならない。そんな状況の中、ここ10数年来部活での謡や仕舞等の稽古に励みつつ、様々な形で能楽の普及にも努める仲間の姿を目にするようになった。

母校や勤務先の学校での能楽講座の開催、地元市町村主催・生涯学習講座への能楽講座開設の仲介、各市町村・文化祭等へ



の参加などである。中には自費で母校（小学校）での能楽講座開催に努めた方もいる。皆さんそれぞれの関心や繋がりで、能楽普及の可能性を求めて一歩ずつ踏み出しているようだ。

人生残り少なくなつた私も、細やかながら、長年お世話になつた能楽への恩返しを試みていた。昨年12月にふるさと奄美と東京・坂井音雅先生の舞台を繋ぐオンライン能楽講座を企画・開催した。私は帰郷を兼ねて現地で参加し、先生からお借りした能面やポスターで会場の雰囲気づくりを支援。約30名が受講し、念願が一つ叶つた思いがした。

能楽五流が集う、全国的にも貴重な存在の横浜能楽連盟。各流派や所属団体の方々も和謡会同様、様々な課題を抱えている



のではないかと推測される。お互いの課題克服・能楽普及へ、相互交流と協力関係が一層深まるよう願っている。

昭和100年から次の100年へ、魅力ある能楽の未来を信じ見守りたい。

謡との「おつきあい」

宝生流 高本 正樹

ある会報で「謡上達への最短距離」という言葉を目にしました。40年程前の昭和59年に、その人がある大学の謡のクラブの後輩へのアドバイスとして投稿したものです。それには「録音テープによる予習」、「うるさがられる程の質問」と「メモによる復習」とあり、こんなふう我真摯に稽古をすれば、職分のレベルになるのは間違いないでしょうが、私の謡の稽古はどうだったのか、少し振り返ってみようと思いました。

大学に入って構内をブラブラしていた時、偶然に高校の同級生に遭遇して能楽クラブ（宝生会）の部室に連れていかれ、すぐに「それ青陽の春になれば」とオウム返しが始まったのが最初です。「ワキ」「シテ」「地」とありますがよくわからず、とにかく先輩の謡う通りに謡うだ

けでした。実は終わった後に一緒に「王将」に夕食を食べに行き、くことが一番の楽しみでした。初めての舞台での連吟「鞍馬天狗」の稽古では、最初の方にある地の「後いかならん打ちつけに」の、同じハリ節なのに「上」から出て「ウキ」「上」に戻して「下」になるところがうまく謡えず、何回も直されたのを今でも覚えています。三つのアドバイスとは違いました。ただし、師弟関係ではなかったのだし、「質問」は少しはしたかも知れませんが、さらに、上級生になれば後輩に教えなければならなくなり、節のアタリの大小や間の長さなど少しわかったように思いました。

社会に出てからは職分の先生に師事しましたが、予習もせずいきなり謡本を開くことも多々あり、地方勤務もあつたことなどから中断してしまいました。職場にあつた宝生会にも入りましたが、年4回の謡会でもぶつつけ本番で役をやるが多かったです。不遜で不真面目な会員でしたが、ここでも終わった後の懇親会が楽しかったです。また、大学のクラブのOBが集まる月1回の稽古にも出ていましたが、ここでも同じで、終わった後の一杯で歓談するのが楽しみでした。そこでの先輩が能「小督」を出し、そのツレで舞台上立つことになり、それを契機として職分の先生に改めて弟子入りして20年程になります。了解を得て録音だけはしていましたが、最近まで同じようにほとんど予習なし復習なしでした。

横浜での囑託会や連合会の月例会に参加してからは役や地頭を仰せつかるようになって、特に謡本にある「カルク」や「オサメ」の謡い方の難しさを感じており、予習・復習が大切であると思うようになりました。本当のところこれほど長く続けられたのは、謡の魅力もありますが、終了後の歓談が大きかったのかもしれない。いずれにしてもこれからも謡との「おつきあい」は続くと思います。

代では通常蓋がついた箱を意味するが、舞台上で見る花籠は上が開いた竹のかごである。このお能は世阿弥作の物狂物(四番目物)、現在能で亡霊は登場しない。あらずじは、おおよそ次の通りである。越前に住む豪族の大迹部皇子(おおあとべおおうじ)は、天皇に即位するたぬめ大和に旅立ち、それを寵姫「照日の前」(シテ)に伝えるべく、文と花籠(花篋)を届けさせる。即位を喜ぶものの、置いていかれた「照日の前」は、皇子(今は継体天皇として大和に住む)に対する思慕の気持ちを抑え難く、侍女を伴って琵琶湖畔を通り、大和に向かう。大和では継体天皇の紅葉狩の列に遭遇し、侍女は花籠を持って近づくが、物狂いとして供奉の者に遮られ、捧げんとした花籠を打ち落とされる。狂女のようになつた「照日の前」は天皇の前で、漢の武帝と李夫人との相愛の曲(李夫人の曲舞)を舞い、花籠を捧げる。それは自分がかつて贈つた花籠(形見)で、狂女が「照日の前」だと天皇はわかる。こうして「照日の前」は再び召され、その後大和の磐余(いわれ)玉穂宮において契りが長く続く。

仕舞の稽古では、だいぶ前に「恐ろしや恐ろしや」から始まる箇所を習ったことがある。当時は全体の話がよくわからず、クルイの箇所を平板にしか舞えず、「陸奥の」忍ぶもじ摺りたれゆえに「や」水の月を臨む猿の如し」という詞章の理解も不十分だった。その後、私が習っている出雲康雅先生のお能を喜多能楽堂で見、「横浜能」で宝生流大坪喜美雄さんのお能を見る機会も得た。芸の面白さ・巧みさや女性の思いの深さがこのお能のポイントであると改めて理解した。「李夫人の曲舞」は、一緒に習っているK君が最近稽古した。この曲舞は世阿弥の父観阿弥の作になるものだが、世阿弥は一種の劇中劇のように自分の作品に挿入した。親子合作とも言える。古代史の世界では、継体天皇「けいたいてんのう」、能の世界では「けいていてんのう」と呼ぶとのことーは近江国三尾(滋賀県高島市)の豪族だった父が夭逝したため、母の里たる越中・味真野(福井県越前市)で育てられ、そこに長く住んでいた。日本書紀によると、二十五代武烈天皇に子供がなく、応神天皇の五代目と遠い縁に当たる「男大迹王」(をほどおう)に迎えが来たところ。王が即位した時(507年)に

はずでに57歳になっていた。第二十六代継体天皇の統治は、当初は河内(現在の東大阪市)と山科(京都)の接する淀川流域を中心し、樟葉・筒木・乙訓と場所を移して行われ20年後にして初めて大和に入り、磐余玉穂宮(いわれたまほぐう、現在の奈良県桜井市)で4年間国を統べ、そこで亡くなった。5世紀半ばから6世紀初めにかけて活躍したこの王(天皇)に関わる宮殿や古墳といった旧跡が関西や北陸に多く残っており、私もそのいくつかを訪ねたことがある。

武烈天皇は粗暴で、子を持たなかった。「照日の前」が本当に大和宮に入ったかどうかはよくわからないが、継体天皇は人間的で、愛情深く、その子3人が天皇を継ぐ。聖徳太子はその曾孫に当たり、現代の皇室はその直系に当たる。継体天皇は実在の可能性が非常に高く、人気も高い。このように天皇が登場するお能は極めて少なく、ある時代には不敬との批判があつたらしいが、「花籠」では、天皇に君や帝という言葉が使われ、子方が演じる。歴史や言い伝えを室町時代の能楽師やお能を愛する人々がどう捉えていたかという点でも、お能は興味深い。

「花籠」

喜多流 久米 五郎太

お能の演目には読み方や意味が難しいものが少なくない。私にとつて、「花籠」もその一つであった。喜多流では、この漢字を「ハナガタミ」と読ませ、意味は花籠だが、そこに形見という意味が込められている。他流でも同じようだが、観世流では「花形見」という表記も用いらしい。ちなみに「籠」は現

能楽花宴に

参加して

金剛流 生沼 依吹

今回の舞台は、私にとつて一番大きな舞台でした。そして、いつも以上に練習をしたので、以前のように失敗をして後悔するようなこともありませんでした。「西王母」という名前の仕舞で、西王母という名の女神が人間界の王様に1000年や10000年も生きられる桃を宴会の最中に届けに行くお話です。桃を持って立っているとき、立っている時間が長いのもあり、手がブルブルして桃を落としそうになって大変でした。西王母は女神様の頂点なので冠を被りました。装束の裾が舞っている最中に冠にひっかからないか心配でしたが、一度もひっかからなかったのうれしかったです。今回はとても良い舞台に出させてもらったなあと思えました。

※「能楽花宴 能舞・能笛コン



サート 竹あかりと共に」は令和7年10月25日に逗子アートフェスティバルのイベントの一つとして逗子さざなみホールにて行われ、装束を着けての舞や能管による演奏など竹にまつわる演目が披露されました。小学5年生の生沼依吹さんは連盟会員で金剛流久良岐会に所属するご両親と共にお稽古をされています。

謡の門をたたいて

金春流 武笠 朋子

よく訪れていた呉服店の二階で謡のお稽古が始まると知り、以前から興味があったので見学させていただき、参加させていただけことになりました。

私は港北ニュータウンに住んでいて、ずっと以前に開催されていた新能を観たり、能楽師の方の講演を聞いたりしていました。狂言師の野村萬斎さん、万作さんの舞台を見たこともあり、プロの方々の声って、お腹に響くようで、聴いていて心地いなあと感じました。

また、能楽師の安田登さんの「能（650年続いた仕掛けとは）」という本を読んで、能は老年期の習い事としてとてもいいと知りました。お腹から声を

出すこと、大きな声など日常ではなかなか出しませんから、いいことだなあと思っておりました。コーラスをされる方も多いですが、私はなんせ音痴で、高音を出すことが苦手。謡は低音だし…、と思っていた時に、近くで習えるとのこと。それはやってみるしかない、との決断でした。

お稽古にうかがった際、以前新能を開催してくださった方が先生と知り、うれしく思いました。能の舞台を少しばかり観てはいましたが、能のセリフは、難しく聞き取れないことももあり、つい、すやすやとしてしまうことも…。でも、鼓の響きや笛の音色は心落ち着く時間だと感じていました。

でもでも、いざやってみると声を出すことさえ難しく、また文字の横にある記号が何を表しているのか、さっぱりわからずの日々です。とりあえずはひたすら先生や先輩の謡を聞いて真似ることしかありません。唸るように、という指導。でも自分の唸り声、なかなか出ないので、一文を読むのではなく謡うとは、息も続きません。腹筋鍛えられるなあ。家人のいない時のお風呂でいろいろ試したりしています。謡の台本は、読んでいて面白く、昔からの言葉はこ

の話から来ているのかと知ることもあります。最近では木賊という植物についても知ることができたところです。

まだまだ、一步ではなく半歩も入れていない私ですが、少しずつと奥深い世界。少しずつでも楽しんでいければと思っています。お稽古の終わりにには、大きな声を出してなんだか気持ちすっきりします。ストレス発散にもいいかも。

玉葛の思い出

下掛宝生流 松藤 久美

真っ白な原稿用紙を前にして何日か過ぎた頃、主人が、「書けたか？」と聞いてきました。「一行も…何書いていいかわからない」とショボン。「じゃあバアちゃん(母)のことを書けば？一周忌も近いことだし」と助け船。昨年11月、九十九歳の義母を見送ったのですが、その際、葬儀の準備「納棺の儀」でお謡を謡ったことをすっかり忘れていました。「玉葛」の一節、

「照らさざらめや日の光。照らさざらめや日の光。大慈大悲の誓いある。法の燈あきらかに亡き影いざや弔わん亡き影いざや弔わん」。

義姉家族、姪家族が集まり、

義母の身支度の中で足りなかったものを誂えたり、お化粧も直し、紅も差して、元々美人な義母はずっとずっと若くなり、私達より若いねって言うほどでした。その後、「これで皆様と触れ合えることが最後となりますので、ゆっくりお別れしてください」と私達だけの時間を作ってくれました。悲しみより慌ただしい日々の中で義母を囲んでの唯一の時間、空間。いつも中心に義母がいて、いつも人が集まり賑やかなことを望んでいたその光景が、またここにあります。そんな中で謡を終えると、義姉がひどく感動し「お謡を初めて聞いた！良いね」と何度も言ってくれました。義母にお礼が言えた気がしました。

だが、しかし、なんです。四十九日の法要と納骨式でのこです。お寺は港南区笹下、墓は川崎津田山の緑ヶ丘霊園、食事は戸塚駅近くの友人が営む中華料理店と、多岐にわたりました。個々での移動は無理なのでマイクロバスを使うことにし、ちよつとしたバスツアーになりました。さみしい気持ちでお腹が一杯とはいかず、ようやくお店に到着。献杯に始まり、美味しい食事に舌鼓。そんな時、義姉から「もう一度、お謡聞きたい。皆にも聞かせてあげて欲

しい」と言われ、素直に謡いま 後で気付きました。仏事とは言 からは好きな一曲を、あるいは した。どうでしょう、従妹・従 え宴席になってしまつてから 好きな謡い処を見つけて、楽し 弟達は「エッ…？ナニ？」と思 は、届かないものなんだと…。 く続けていけるよう、精進して につきり空振りアウトでした。 力不足も…と。とは言え、これ まいります。

能楽堂だより

令和8年度の公演案内

開館30周年記念特別公演

令和8年7月頃に横浜能楽堂が再開館いたしま

10月24日(土) 午後2時開演

狂言「八尾」(和泉流) 野村又三郎

能「西行桜 杖之型」(宝生流) 大坪喜美雄

S席八千円、A席六千円、B席五千円

今年度からは当連盟の会長も

代わり、新しい体制がスタート

します。この機会に様々な新し

い試みや会員増のための施策も

始めたいと考えています。全国

でも類を見ない、五流が揃つて

参加するこの「横浜能楽連盟」

の存続には、会員の皆様のご協

力も不可欠です。また、たまた

まこの「幽玄」を手に取られた

という方も、お稽古をしている

いないに拘わらず、当連盟に少

しでも興味を持っていただけた

ら幸いです。

(F・Y)

◆編集後記◆

2年半の工事期間を経て、本 年7月頃から、いよいよ横浜能 楽連盟のホームグラウンドとも いうべき横浜能楽堂が再開館さ れます。10月の「五流能楽大会」 は、この新しくなった能楽堂に 戻つての開催となります。

す。ぜひお運びください。
現在決定している今年度の公演は次の通りです

再開館記念公演 第1日

7月4日(土) 午後2時開演

「翁」(観世流) 観世清和

舞囃子「老松」(観世流) 大槻文藏

狂言「末広」(大蔵流) 山本東次郎

能「春日龍神 龍神揃」(宝生流) 宝生和英

S席一万二千元、A席一万元、B席八千円

普及公演「眠くならずに楽しめる能の名曲」

12月20日(日) 午後2時開演

狂言「舟渡聲」(和泉流) 井上松次郎

能「船弁慶 遊女ノ舞・替ノ出」 (金春流) 山井綱雄

S席五千円、A席四千元、B席三千五百円

普及公演「バリアフリー能」

令和9年3月22日(月休) 午後2時開演

狂言「昆布売」(和泉流) 三宅右近

能「岩船」(喜多流) 狩野了一

S席五千円、A席四千元、B席三千五百円

介助者1名無料

10月以降の毎月第2日曜日には、普及公演 「横浜狂言堂」を開催。狂言2曲を解説付 きでお送りします。

※チケット発売などの詳細は横浜能楽堂の ウェブサイトをご覧ください。



ささ

◎横浜能楽連盟ホームページ

アドレス(<https://yokohama-nohgakurenmei.jp/>)

連盟の紹介・行事案内・公演予定・幽玄バックナンバーなど、様々な情報をご覧いただけます。ぜひ一度開いてみてください。

なお、連盟加盟団体の方は「お問合せ」フォームからご連絡いただければ、大会情報などを掲載いたします。

第71回 横浜能

9月13日(日) 午後2時開演

狂言「鍋八撥」(大蔵流) 山本則重

能「石橋 大獅子」(観世流) 梅若紀彰

S席八千円、A席六千円、B席五千円

◎連盟後援行事

「第40回神奈川県宝生流謡曲大会」4月11日(土) 久良岐能舞台／「第17回横浜喜多会能楽大会」6月13日(土) 久良岐能舞台／「横浜宝生流連台会第39回謡曲大会」8月22日(土) 横浜能楽堂本舞台／横浜金剛会「第27回謡曲と仕舞のつどい」8月23日(日) 横浜能楽堂本舞台／「第59回宝生流教授嘱託会関東甲信越大会」9月30日(水) 横浜能楽堂本舞台

◎事務局 尾崎

TEL

〇四二一七二五―七四四九

横浜能楽連盟連絡先